
風と大地と炎と海と ～風の章～

中村もへじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風と大地と炎と海と　　風の章

【Nコード】

N0493V

【作者名】

中村もへじ

【あらすじ】

超自然的存在と少年の架空ファンタジー。

恋愛要素はまるで無しですが、どうぞよろしく♪

プロローグ

馬の鼻息は荒く馬の魂が放つ気が乱れている。

朝早くから走ってきたので、馬も走る事に疲れたのか。それとも、僕のただならぬ様子に怯えているのだろうか。しかし、戻る事は出来ない。少しでも早く辿り着かなくては。小さなあの子と約束したのだから。

僕は精一杯優しい声で馬に語りかけた。少しでも馬が落ち着くように。

「大丈夫。ほら、もう少しで森を抜ける。もう少しだよ。森を抜けたら村があるから、そこで休息をとろう。さあもう少しだ、がんばろう」

その時だった。暗雲が立ち込めて急に辺りがうす暗くなったかと思ったら、雷鳴と共に稲光が走った。そして、頭上に真っ黒な影が二つ浮かびあがった。二本足で立っているが、人間とは明らかに違う異質な者。

——超自然界の者？！

「ヒヒーン！」

馬は怯え前足を上げ、僕はそのまま馬から転げ落ちる。馬はそのまま走り去り僕はただ空を見上げた。

良い精霊は人を助ける。悪い魔物は人を危める。
頭上で暴れている超自然界の者達はどちらだろう。

風の章 1

「許さん！」

いきなり目の前に姿を現したグロームはひどく憤慨していた。

グロームの心模様など俺には関係ねえ。

「よう、グローム。おっかねえ顔してどうした？」

俺はいつものように軽口を叩く。

が、今日のグロームはちと様子がおかしいかった。

いつもなら前置きなく切りかかってくるか、そうでなければゴロゴロと喉を鳴らして笑い飛ばす奴なのに今日に限っては黙って立っている。・・・剣を構えながら。

――？

「なんだよ？顔色悪いぜ。真っ黒だぞ。って黒いのはいつもの事か！」

俺が笑ってもグロームは静かに立っている。・・・剣を構えながら。

――？

「なんだよ！見苦しい顔して！用がねえなら向こう行けよ！」
追っ払ってみようとしてもグロームは静かに立っている。・・・剣を構えながら。

――？

「どうしたんだよ？なんかあったのか？」
さすがに俺も心配してやった。それでもグロームは静かに立っている。・・・剣を構えながら。

すると暗雲の中でグロームの体が光りだした。

——稲光

体が雷を蓄えて小刻みに大気を震わせている。

——雷鳴

そしてこんな事を言い出しやがった？！

「返答に次第で切る！何をした！」

——おかしいじゃねえか？！

グロームが俺にお伺いを立てているだつて？！

お前は他者の話を聞くような奴じゃねえだろ？！

本当にどうしちまったんだよ？一体？！

そうこうしている間にもグロームの中の雷が静かに剣先に蓄積されていく。

静かに圧力をかけられても、グロームの憤慨の理由が全くわからない。俺はただ水浴びしにこの森にやってきただけなんだ。

「知らねえよ！」

俺が答えると同時に、振り下ろされたグロームの剣が光を放ち、落雷が俺の真横を通り過ぎた。

バリバリバリバリバリバリ！

俺の背後で大木に雷が直撃した。

——なんてひどい奴なんだ！

罪も無い大木を黒こげにしやがって。。自然界の限りある命がこれだけ大きくなる一体どれぐらいの時間がかかると思っているんだ！超自然界の存在としては有るまじき行為だねえ。全く。

そんな事お構いなしにグロームが怒鳴る。

「俺は本気だ！次は外さない！何をした！」

「本当に知らねえよ！」

言ったところで無駄だ。怒りで我を忘れたグロームの耳には入っていない。

グロームは再び剣を構えて雷を作っている。

——めんどくせえ！よくわかんねえけど受けて立つぜ！

「かかって来いよ！」

次の瞬間、俺は風の気を手に集め真空の刃を作った。

そして、グロームが剣を振り下ろすと同時に真空の刃を投げた。

バリバリバリバリバリバリ！ドッカン！

真空の刃が雷を二つに裂いた。

それから立て続けにグロームが剣を振り下ろす。それに合わせて俺は真空の刃をいくつも投げる。眩い雷が轟音と共にいくつにも炸裂している。

「どうしたんだよ？」

俺の話なんか聞いてないねえ。グロームは次々に雷を走らせている。頭に血が上り見境なくなっているんだ。

——やっぱりいつもグロームか？

見境なく暴れ出す辺りがいつもグロームなんだが・・・それにしても何やら内に秘めたモノがいつもと質が違う気がする。どういう事だと思案していると、グロームは再び剣を構えているのか見えた。

——まだやるのか？

俺も再び真空の刃を構えた。が、ふっと真空の刃を消した。

——飽きた。

そして疾風に変化してその場から速やかに撤収した。

俺は風だ。風の性分はいつまでも同じ所には留まっではいられないんだ。

風の章 2

——自然に優しくねえな。

グロームはところ構わず剣を振りまわし雷を走らせている。時々、雷を直撃した大木が発火している。あれじゃ自然界の生き物も迷惑だろうなと俺は一山ほど離れた辺りで眺めていた。

——どうしたもんかねえ。

今日のグロームはケンカをしてもつまらない。軽口には乗ってこないし。

早く収まってくれないもんかねえ。

ヒヒーン！

すぐ近くで馬が鳴いた。

馬に乗っていた人間をその場に落として、馬はとっと走り去って行く。

——こんな所に人間？

人間に氣をとられてグロームに気づかれた。

バリバリバリバリバリバリ！

腹に衝撃が走った。グロームの剣をまともに食らって胴体がまっぶつた。

——ついてねえな。

グロームはまっすぐこちらに向かってくる。

「見つけたぞ！」

途中、行く手を遮る大木を片手でなぎ払い、俺の方を向き直して再び剣を構えた。

グロームがゆつくりと剣を振り降ろした。

一瞬遅れて真空の刃を構えたが、体が裂けちまっているから思うように動かない。

「うおおおお」

グロームは雄叫びのような声を上げながら剣を振り下ろしてきた。眩しい雷鳴と雷光が俺に迫ってくる。

——避けられねえ。

が、グロームの雷電はどこにも当たらない。

——あれ？

「大丈夫ですか？」

背後から人間の声がする。

——今のは？この人間がやった事なのか？

「どこだ！」

グロームはうろつろと辺りを見渡している。

その姿はまるでクマか何かの大型の動物ようだなと思った。

「ゆるさん！」

グロームは喚きながら森の奥に消えていった。

背後の人間は結界がグロームから俺を隠したらしい？

——あれ？どういう事だ？

俺は背後の人間に問い掛けた。

「お前・・・俺が見えるのか？」

背後の人間はこくりと頷いた。

「お前・・・俺を助けたのか？」

背後の人間はこくりと頷いた。

——な、なんだと？！

「なんで俺が人間なんかに助けられなきゃならねえんだ！」
俺がイライラすると大気がグルグル回り出した。

背後の人間が大気の流れに吹き飛ばされそうになっている。

「・・・あの、すみません。貴方は動けなさそうでしたし、あのま
まですと僕にも雷が当たりそうだったので、一緒に結界に入れてし
まいました」

——確かにあのままじゃ、こいつも危なかった。

——不可抗力か。不可抗力なら仕方ない。

「・・・じゃ、お前は俺を助けたわけじゃないんだな？」

背後の人間はなにやら考えている。

「だ、か、ら！お前は自分を守るために結界を張ったら、たまたま俺も中に入っちゃったんだよ！わかったか！」

背後の人間は一瞬ビクリと大気を揺らした。そしてこう言った。

「はい、僕は自分の身を守っただけです」

「当然だ！人間は弱い！限りある命だからな！自分で自分を守る義務がある！」

太古の昔から俺は人間ごときに助けられた事など一度もない。

「だが俺は強い！人間ごときに俺を助けるなんて勘違いにも程がある！わかったか！」

か弱い人間は近くの木にしがみつきながら答えた。

「わかりました！おっしゃる通りです！」

「わかればいいんだ！わかれば！」

ふうと息を吸い込むと俺の気持ち落ち着いていた。そして大気の動きも緩やかになった。

風の章 3

「・・・あの、大丈夫ですか？」

風でもみくしやにされた衣服を整えながら、人間が近づいてきた。

——なんだよ！まだいたのか？！

俺は人間に目をむけた。人間は俺が思っていたより小柄だった。灰色のフードから金色の髪の毛がこぼれている。俺はフードの中を覗き込んだ。金色の髪の毛が縁取る顔はソバカスが残るあどけない顔だった。

——なんだと！小僧じゃねえか！？！

——俺は人間の小僧なんかに助けられたのか？！

——認めたくねえ・・・

へこむ俺に構わず、

「キズを見せてください。もしかしたら治せるかもしれないですから」

とか抜かしてやる。

これが大人だったら“近づくな！”と一喝しておしまいにするんだが、俺はこう見えても自然界の小さな生き物には優しいんだ。

「平気だ。もう治る。人間の小僧ごときに助けられるほど、俺は落ちぶれちゃいねえ」

と、風圧で下がらせた。

すると小僧があまり軽いから後ろの木まで吹っ飛んだ。

——あつ、わりい。

「すみません」

と、自然界の小さな生き物はつぶらな瞳が悲しみをたたえている。

——な、泣くな、小僧。

ひ弱な小動物には優しくしてやれと本能が訴える。

「・・・お前には無理かもしれないが、もしかしたら治せるかもしれない。まあ、ちつとぐらいなら試されてやってもいいぜ」

すると小僧は鳩が豆鉄砲を食らったみたいに驚いて目をぱちぱちさせた。

「そうですか。それじゃあ、僕でよろしければ是非やらせて下さい」

そこで伸ばしかけた手をふと止めてこんな事言いやがった。

「・・・あの・・・僕の事・・・食べたりしないですよね？」

——な、なんだと！

「俺は人間なんか食わないぜ！」

俺がそういうと小僧はカラスが水鉄砲を浴びたぐらいに驚きやがる。それからふつと口元を緩めた。

それから頭に被っていたフードをとり、俺の腹をまじまじと覗き込んでいる。俺の腹は千切れて俺の体を構成する気が滲み出している。

でも、もうけっこうくつついている。

俺もまじまじ小僧を観察した。年の頃は十から十五ぐらいか？もちよい下か？いや上か？正直、あんまり人間には興味がないかったから大人じゃない事ぐらいしかわからない。ただとても澄んだ空色の瞳をしている。そういう空の色は好きだぜ。

小僧は自分の手を俺の腹のキズにかざした。傷口に暖かいものが伝わって来る。すぐに気が滲み出て行くのが止まった。

——人間のくせになかなかやるじゃねえか。

本来、人間には俺らは見えない。体を構成する理が違っからな。ちよっと感のいい奴でも何かいるような気がするというぐらいのものらしい。しかし稀に俺らでもびっくりするぐらい超自然的な能力を持つている奴が現れる。確かこの辺りじゃシェイマとか呼ばれているはずだ。それでも自分の気を使ってキズを治すなんて、修練を積んだシェイマでもなかなか出来ないと聞く。すげえな、この小僧は難なくやっている。俺は思わずひゅうつと口笛をふいた。それから確認するように俺は聞いた。

「シェイマか？」

「はい、まだ一人前ではありませんが、シェイマの端くれではありません。・・・あの、どうですか」と、心配そうな顔をしている。

俺は体を動かしてみた。すっかり元通りだ。

「ふうん、ありがとうよ。人間の中にも奇特定の奴がいるもんだな」

小僧はにっこり笑った。

「お役に立てたのなら良かったです」

「つうか。なんで人間のシェイマが俺を助けるんだ？正直助けなんぞ必要ないけどな！」

小僧はにつこり笑うと淡々とした口調で答えた。

「普通は助けますよ。目の前で倒れたんですよ。できる事があれば何かしてあげるものでしょ」

——そうか？

俺らの常識では放っておくもんだぜ。

まあ、か弱い生き物は助け合わないと生きていけないんだろうな。すぐ死んじまうもんな。大変だな小動物は。

ま、俺には関係ねえな。

「ふうん。でもさっきは俺の事を怖がったよな？」

「はい、貴方のような超自然界の方とお話するのは初めてなので、正直怖かったのです」

「今は怖くないのかよ」

「はい。人間を食べたりしないとおっしゃいましたから」

「ふうん」

それから、小僧は俺の横に腰を下ろした。そして自分の足首に手をかざし始めた。見ると、足首が赤く腫れ上がっている。

「どうしたんだ？それ？」

「馬から落ちた時に」

と、小僧はぼつりと言った。

「他のキズを治す前に、自分のキズを治せよ」

と、俺が言つと、

「貴方の方が大怪我でしたから」

と、小僧は答えた。

「大怪我で動けなくても俺達、超自然界の奴らは死んだりしねえぜ」

「そうなんですか。知りませんでした」

「俺達はそういう存在だ。だから次から放っておいていいぞ」

「そんな事言われても、僕の目の前で倒れたまま動かなかつたら、そのまま通りすぎる事なんか出来ませんよ」

と、小僧はにつこりと笑った。

——自然界の小僧と超自然界の俺とはやっぱり何か違うもんなんだなあ。

と、俺は再認識した。

風の章 4

「どこまで行く気だったんだよ？」

「えっ？」

「急いで馬を走らせていただろう」

「北のアルス山のふもとにあるスエーヴィル村まで行くつもりです」

「その格好でか？」

「？」

「スエーヴィル村の辺りはまだ雪残っている。あの辺りの人間はもつと厚手の布を着込んでいるぞ」

「そうなんですか」

「まあいい。送ってやる。頼んでないけど、お前の結界に入っちゃまった礼だ」

俺自身が驚くような申し出に、小僧は一瞬戸惑いをかくせない顔をした。それからにつこり笑って、ぺこりと頭を下げた。

「お願いいたします」

そこで俺はちよつと己の姿を省みた。

——泥だらけだ。

「ちょっと待っている」

「はい？」

「泥だらけだ。洗い流してくる」

俺はぴゅんと川までひとつ飛びした。

それから、川の水で体についた泥を流し、数秒後には小僧の所に戻った。

「待たせたな」

小僧は俺を見て、少し驚いたようだった。

「真っ白できれいなんですね」

と、言つて、

「キラキラと光っている」

と、目をキラキラさせて俺を見ている。

「ふん」

と、澄ましてみたが誉められているらしいから悪い気はしない。

「馬の姿になったら乗れるか？」

「はい、ありがとうございます」

そこで俺は空を走る風の馬に姿を変えて、小僧を乗せて空に舞い上がった。

——しかし、俺はなんだってこんな人間なんかを運んでやっているんだろう。

俺達は超自然界の生き物は自然界の気で形作られている。気という

のは、草でも木でも動物でもすべて生きているモノが持つて、知らず知らずのうちに周りに放っている。それが俺達の体を形成し力になっている。その中では人間の放つ気は特殊だ。人間は感情が複雑で思っている事と言っている事が矛盾していたり、ころころ変わったりする。だから人間の放つ気も感情に会わせてころころ変わる。気持ちの良い気を放つ奴はいいが、腹黒い奴なんて側にきただけで気持ち悪くなる。だから俺は人間の気が嫌いだ。決して人間に近づかないようにしていた。

しかしこの小僧は違う。大気のように自然で穏やかな気を絶えず放っている。これがシェイマ特有の気なんだろうか、それともこの小僧の気なんだろうか。よくわかんねえがこの小僧の気は悪くない。むしろ気に入った。

風の章 5

北のアルス山のふもとにあるスエーヴィル村には、あつという間に
ついた。山のふもとは日が暮れるのが早い。村はすっかり薄暗くな
っている。

「どうもありがとうございます。とても助かりました。それに思っ
たより寒くなくてよかったです」

「俺が冷たい大気を退けておいてやっているからな」

「そうだったのですか。本当にありがとうございます」
と、小僧が話しているのは遮るように、俺は言った。

「乗せてやった事、誰にも言うなよ」

小僧はきよんとしている。俺の言わんとする意味がわからなかつ
たらしい。

「人間なんか乗せたなんて知れたら不名誉なんだよ」

小僧は、ああそうかという顔をして、

「わかりました。絶対に誰にも言いません」
と答えた。

「本当にどうもありがとうございます」
と、もう一度、小僧は礼を言った。

そして、姿勢を正して俺の前に真っ直ぐ立ち胸の辺りで互いの袖に
手を入れ深々と頭を下げた。
それから俺達は別れた。

風の章 6

その後しばらく俺は村の外から小僧を見ていた。どうでもいい事だがこの村は村全体が暗い貧しい気で覆われている。嫌な気だ。俺はあまり近づきたくない。

それでも小僧のする事に少しばかりの興味がある。

だから俺は風に乗って流れてくる音と大気の動きで小僧の様子を伺っていた。

小僧は村のはずれの一際みすばらしい家に向かっていった。

家の中は一際暗く沈んだ薄ら寒い気で溢れている。

「こんばんは」

小僧がドアを叩く。

「はい、どちら様ですか」

家の中からやつれた顔をした女が出て来た。

女は日が暮れてからやってきた来客を胡散臭そうな目で見ている。

「私は、東の都ツェーントルから来た者です」

と、小僧が挨拶しても女は警戒心を解かない。すると、

「司祭様！こつちこつち、おとうはこつち！」

小さな女の子が飛び出てきて、小僧の手を引っ張った。

「こら！知らない人にいきなり、この子は…」

と、たしなめる母親の言葉を遮って、

「知っているもん。おとうの事を治して下さいってお願いしたんだから」

と、女の子は答えている。

母親は驚いて聞き返す。

「いつお願いしたの？」

女の子は嬉々として答える。

「夢で会ったの！」

母親がキリキリとした気を放って声を荒げた。

「何を言っているの！この子は！夢で見たからって本当にくるわけないでしょ！」

そこで女の子が泣き出した。

そして小僧が口を開く。

「純粋な願いが僕の所まで届きました」

すると母親のキリキリとした気が小僧に矛先を向けた。

「貴方が司祭だという証拠はあるの！」

小僧は静かに息を吸い込み、自分の言葉に自分の穏やかな気を含ませてゆっくりと話かけた。

「僕は司祭ではありません。神殿の中で世の中の理を学んでいるシエイマの一人です。しかし、僕には人を治癒する力があります」

そう言って母親に向かって手をかざすと、小僧の穏やかな気が母親のキリキリとした気を包み込んで自分の穏やかな気に同調させてしまった。

「・・・あら？・・・私・・・今ずいぶん苛立っていたみたいだね。主人の看病であまり寝ていなかったから心身ともに疲れてしまつて・・・」

と、母親は夢でも見ているかのように小僧を見ている。

小僧は泣いている女の子の方を向いてしゃがみ女の子と同じ目の高

さになって話始めた。

「お父さんの具合はどうですか？」

小僧が頭を撫でると、泣いていた女の子は泣きやみ、

「早く早く！おとうが、死んでしまうよ」

と、小僧の手を引っ張った。

そこで母親は我に返って言いにくそうに言葉を濁した。

「あの、・・・その、・・・うちにはお金が・・・」

小僧はにっこり笑う。

「お金はいりません。僕はシェイマですから」

「そうだよね！こつちよ！こつち！早く！」

女の子は無邪気に小僧の手をひっぱって家に招き入れる。

パタンと玄関のドアが閉まった。

暫くして、子どもの歓喜と母親の泣き声と今まで寝ていたであろう男の感謝の声が聞こえてきた。

家の中はさっきまでの薄ら寒い気が消し去り、明るい太陽のような温かい気で溢れている。

俺は思わず、ヒューと口笛を吹いた。

——数千年に一度現れる本物のシェイマだな。

そして俺はスエーヴィル村を後にした。

風の章 7

そっぴゃグロームはどうしたんだろうか。

俺は己の氣を大氣の中に広げた。

氣を四方八方に広げると必然的に体が薄くなつて大氣に溶ける。

そっぴゃつて感覺を大氣に同調させて遠くの物事を感知する。

そしてグロームを見つけた。

グロームはザーパトという村の一軒の貧相な家の前にいた。

家に明かりは着いてなく、グロームは暗闇の中で大きな巨体を小さく丸めて身動きせずじつとうずくまるように座っている。グロームの頭上では、まだ暗雲が立ち込めていて、時折ゴロゴロと雷鳴がとどろいている。それでも先程よりはずいぶん落ち着いている。話し合いの余地はありそうだ。

俺はグロームを感知した所に大氣に溶けた己の氣を集めて形成し直した。

「ようっ」

「……ようっ」

と、顔をあげたグロームを見て、俺は驚いた。体はボロボロで所々千切れて体を形作っている氣が垂れ流しになっている。そして憔悴しきつっている顔で呟いた。

「……さっぴきは悪かった」

「誤解が解けたのなら、それでいい」

と、俺が答えた。それで、俺達のケンカは終わりだ。

俺は、グロームをまじまじと眺めて聞いた。

「どうしたんだよ」

「やられた」

「見ればわかる」

それから、

「誰に？」

「何で？」

と、いう俺の質問には、グロームは何も言わずただ頭を振るばかりだった。

俺がそれ以上何も言わずに黙ると、グロームも暫く口を開かなかった。

そして、やっと一言しゃべった。

「…さっぱりわからない」

「ふうん」

当事者のグロームがわからないモノを、第三者の俺にわかる筈がない。

「何かわかって話をしたくなったら聞いてやる。俺のところ来い。もちろん話したくない時は来なくていい」

そう言い残して俺はその場から離れる。

グロームの喉から押し出した低い声が大気を振動させた。

風の章 8

夜が明けた。

登っていく太陽を風通しの良い丘の上の上で眺めている。今日は雲ひとつない良い天気だ。

しかし、空が晴れても心は晴れない。ずっとグロームの事が気になっている。一体、グロームに何があったんだろう。あんな憔悴した奴の顔など始めてみた。

グロームは雷の気を持つ。普段、奴は寡黙で温厚だ。時折、剣を振り回して雷を落とす。それがグロームの性分だ。昨日のケンカもその延長だと思っていた。

それがなんだって、人間の家の前なんかで、うずくまってるんだ？あの家に住んでいる人間はどうしたんだ？そういえば、あの家だけじゃなく、あの村に人間が見当たらなかったな。廃墟というわけでもなさそうだし。その事がグロームに関係あるのか？

——まあ、いつか。

俺がここでいくら考えても、当事者のグロームが「わからない」と言う事が、第三者の俺にわかる筈がない。グロームが何か話してくれるならそれでよし。グロームが何も話さず自分の胸にしまい込むならそれもよし。

——まっ、俺にしてやれる事なんか何にもねえ。

そして、俺は己の気を広げて大気に漂った。

風の章 9

遠くに目をやると、川の水がキラキラ光っている。この時期の水は、山からの雪解け水だから一際冷たくて気持ちがいい。水浴びしようと、ひゅんと川までひとつ飛びした。川に近づいて、そこで気がついた。

——見慣れたモノが流れている?!

近づいてよく見ているやつぱりそうだ。

昨日、スエーヴィル村に送ってやったシェイマの小僧だ。

「よっ」

俺が声をかけやっても、小僧はちらつとこちらを見るような素振りしただけで何も言わない。

「おいおい、いくらなんでも水遊びするには人間には寒いんじゃないか?」

俺はふわっと飛んで小僧の首根っこをつかんで川から引き上げた。

「ほらみる。川の水と同じ温度になっている・・・」

——あれ?なんかこいつ、昨日と顔が違うぞ?

よく似た他の奴か? いやでもこの気は小僧には間違いないし・・・人間って子どもから大人になると姿が変化するけど一日でそんな変化するもんなのか?・・・顔が真っ赤になって膨張して瞼だつて膨らんで片目なんか全然開けねえんじゃないやね? それになんかあちこち体

の成分が流れ出しているぞ？
俺は思わず確認してみた。

「お前は昨日の小僧だよな？」

「……」

小僧は何にも言わない。

「おい、どうしたんだよ？」

「……」

「寝ているのか？おい、なんか答えるよ」

「……う」

小僧の唇がかすかに動いた。

「……そ……ええ」

「どうした？」

「……名前……聞かなかった」

「名前？」

そっぴや人間って個別に認識するためにそれぞれ名前あるんだっけ？

「……ぼ、僕はスイーン……貴方は……」

俺の名前か……グロームが俺を呼ぶ時のアレでいいのか？

「俺のはヴィエーティルだ。短くしてヴィーって呼ばれる時もあるぜ」

「…そつか…」

小僧の放つ気がずっと弱まった。

——あれ?!もしかしてこいつって死にそうなのか?

人間って本当に弱いな。もう死んじまうのか。

そこで俺は小僧をまじまじ眺めた。

小僧の放つ気が体の成分と一緒に流れ出していく。

・
・
・

・
・
・

・・・それにしても良い気を放つ奴だった。こんな気を放つ奴は後何千年も出てこないだろうな。

・
・
・

・
・
・

・・・俺、人間じゃないけどたまには人間の理に従っても悪くは無
いよな。

・
・
・

・
・
・

・・・俺って何すりゃいいの？俺、シェイマみたいに気を使って人間を治す事なんかした事がないぜ。

・
・
・

・
・
・

・・・そうか！シェイマにやらせりゃいいんだ！

——名案だ。シェイマのいる所に連れて行って、シェイマに小僧を治させればいい。

で？シェイマってどこにいるんだ？東の都ツェーントルの神殿か。
行けば後はなんとかなるだろ？

「おい小僧。ちょっとの辛抱だからな。がまんしろよ」

そして俺は東の都ツェーントルの神殿を目指した。

風の章 10

東の都ツェーントルの町並みは古い。赤茶色のレンガ作りの建物で統一されている。

——神殿はどこだ？あれか？

こんな人間の多い所になんか近づいたりしないからよくわからない。見渡すと、都の中心にそびえ立っている塔がある。塔の上には大きな鐘がぶら下がっている。

この都で一番目立つ建物に近づいてみると、建物全体に結界がはつてある。これが神殿だろう。

——さて、どうしたものか。

俺は神殿の周りをぐるりと一周した。

——神殿の入口にでも置いていくか。

そう思った時、小僧がむせた。放つ気はまるで昆虫並みで呼吸もかなり弱くなった。

——おいおい、大丈夫かよ？

俺は神殿の入口にでも置いていく計画を捨てて、一番大きな窓ガラスを叩き割って建物の中に飛び込んだ。
体中ピリピリと引きちぎられんばかりに痛い。

中にいたのは、じいさんとはあさんだった。小僧みたいな服を着て

いるからシェイマに違いない。

じいさんとばあさんは驚きに満ちた顔で俺と小僧を見比べている。

「・・・スイーン?!」

ばあさんは、

「どうしたの? 何があったの? スイーン? 大丈夫なの?」

と、やかましく駆け寄り、じいさんは物言わずに俺を見ている。

ピリピリとした気を放つばあさんは無視して、俺はじいさんに聞いた。

「お前はシェイマか?」

じいさんは答える。

「いかにも」

俺は小僧を床に置いた。

「小僧を治せるか?」

じいさんが答えた。

「大丈夫です」

ばあさんは一瞬涙を流したようだったが、じいさんの言葉を聞いて安心したのかすくつと立ち上がった。そしてすぐに気丈な顔を作り、取り乱し事などなかったかのように

「清潔な布。それから薬とお湯。必要なものをここに運ばせましょう」

と、部屋を出て行った。

部屋の外では、

「今の音はなんですか？」

「お怪我はございませんか？」

と、窓ガラスの割れた音を聞きつけてやってきた者の声がした。

「スイーンが帰ってきたのよ。怪我をしているから清潔な布。それから薬とお湯。布団も用意して。後は治癒の出来るシェイマ達をすべてここに呼び集めなさい。そうそう、スイーンを探しに行った者たちを呼び戻す事も忘れないように」

ばあさんが次々に指示を出している声がする。

——小僧の事はこれでいい。

「じゃ、後は頼んだぜ」

俺は窓からひらりと退散した。

風の章 11

——とんだ災難だ。

何か楽しくて、結界の張つてある所に俺が飛び込まなくちゃいけないんだ。体がちぎれるかと思った。

まあいい。過ぎた事だ。所詮は自然界の小さな生き物の揉め事だ。俺には関係ない。

そして俺の中では完結した出来事になった。

それから、俺は自由気ままにぶらぶらと風任せにあっちへ行ったりこっちへ行ったりしていた。

ふと気がつくと北のアルス山の近くだった。数日前に小僧を送ったスエーヴィル村が見える。すっかり小僧の事は忘れていたのだが、近くを通りがかったものだからつい寄ってみるか、なんて気を起こししまった。

スエーヴィル村の側まで来ると、数日前とは何か違う事に気がついた。村全体を覆っていた暗い貧しい気がない。もう少し近づいてみた。村には人の姿が見えない。

——どういう事だ？

これはグロームのいたザーパト村と同じじゃないか。グロームならわかるだろう。グロームなら、何か知っているだろう。グロームに話を聞けば、何かわかるに違いない。

俺はグロームを探して、ザーパト村に向かった。

それなのに一体どうした事か、ザーパト村にグロームの姿が見えない。風に耳を澄まして、風に乗って流れてくる気配を感じたがこの辺りにはグロームはいない。人間もいない。どうして誰もいないんだ。

完全に肩透かしをくらった。俺にはさっぱりわからん。

俺は風だ。風の性分は風通しの良いのが好きだ。突き当たって行き場がなくなるのはすごく嫌いだ。こういうすっきりしない気分も大嫌いだ。

——— どういう事なんだー！！！！

俺の気分に伴い俺の周りの大気がグルグル回りだした。

そこで俺は空を見上げた。日はまだ高い。

頭上には雲ひとつないどこまでに澄んだ空が広がっている。

この空は・・・小僧の瞳の色だ。

そこで気がついた。

——— 小僧だ。

すっかり忘れていた。そうだ、小僧がいる。小僧ならわかるだろうか。小僧なら、何か知っているだろう。小僧に話を聞けば、何かわかるに違いない。

俺は、早くこのすっきりしない気持ちとおさらばしたかった。そう思ったら、いても立ってもいられない。

小僧を置いて来た東の都ツェーントルの神殿を目指して、まっしぐらに飛んだ。

風の章 12

黄昏時、東の都ツェーントルをオレンジ色の光が包んでいる。

そして小僧は見つからない。

結界の中の神殿にいるのだろうけど、さすがに俺ももう一度結界の中に飛び込む気にならない。

——胸の中がすっきりしない。

——もやもやする。

——わけがわからん。

俺の中でやり場のない苛立ちがぐるぐると渦を巻いている。

俺の感情に合わせて俺の周りで大気がぐるぐると渦を巻き始めた。

渦はどんどん、どんどん、大きくなって・・・

ゴゴゴゴゴゴオオオオ・・・

神殿の上に竜巻を形成した。

竜巻は神殿の屋根を巻き上げ、窓を割り、地上の大木を引き抜か**ん**ばかりの勢いで揺すり出した。

その時だった。

見た事のある黒い巨体が出てきた。

「ヴィー、落ち着け！」

グロームだ。

「貴様、一体、今までどこにいたんだ」

「ヴィー、気を静めろ！落ち着け！」

「貴様に聞きたい事があった」

「わかったから落ち着け！人間が巻き込まれる！やめるんだ！」

「人間だと？！そんな事、俺達の知った事か！」

「ヴィー！落ち着け！」

「なに言ってるんだ？俺はいつも通りだぜ」

そう言いながら俺はグロームに近づいていった。竜巻も動きだす。竜巻は近くにあるものを片っ端からふっ飛ばし吸い上げていく。するとどこからか小僧が出てきた。

「ヴィー！」

小僧は軽いので、あっという間に竜巻の中に吸い上げられた。

俺がせっかく助けてった小僧の命を今度は俺が奪うのか。それもなんだか目覚めが悪そうだ。

俺は天空に舞い上げられた小僧を捕まえた。

「よう！」

小僧が口を開いた。

「ヴィー、どうしたんですか？落ち着いてください」

「俺は落ち着いているぜ。いつも通りだ」

小僧は辺りを見渡した。

竜巻の中では玉砕された石材や木材がぐるぐると渦を巻いて飛びかっている。時々こっちに向かって飛んでくる異物を俺が吹っ飛ばす。俺は当たっても問題ないが小僧は自然界の小動物だからな。

小僧はそんな様子に目をやってから淡々とした口調で俺に言った。

「とりあえず僕を地面に降ろしてもらえませんか？」

「そうか」

そのままストーンと小僧を地上に降ろすと、竜巻もストーンと消えた。地上は突然起こった竜巻でひどい有様だった。廃墟と化している。それでも自然界の生き物には危害は加えてない。

何度も言うようだが俺はこう見えても自然界の小さな生き物には優しいんだ。

そうこうしていると1つの瓦礫の中からグロームが立ち上がった。

すると、

「どうしたんだ？」

「大丈夫ですか？」

「怪我がないか？」

と、人がわやわやと集まってきた。不安や動揺や苦痛といったわずらわしい気が辺りに広がりだした。

——胸くそ悪い気だぜ。

「行くぞ！グローム！」

そして俺とグロームはその場から姿を消した。

風の章 13

辺りはすっかり暗くなっていた。夜の帳を知らせるフクロウが鳴いている。

俺達は人間が足を踏み入れたりしない森の奥にいた。グロームは適当な所にどかと腰をおろしたが、俺は風の性分でじっとしているのが苦手だから、グロームの側をぶらぶらと歩いている。

暫く沈黙した後、

「人間にとり憑く魔物がいるんだ」と、グロームが切りだした。

そこでまたグロームは口を閉じた。上手く話を聞き出さないとグロームの言いたい事が俺に伝わらない。どう聞き出した良いものかと考えながら相打ちを入れる。

「ふうん」

「不安・疑心・憎悪という暗い気を好む奴だ」

「ふうん。不安・疑心・憎悪、どれをとっても人間は少なからず放つ気だな」

何気なく俺が答えると、グロームはため息をついて黙ってしまった。このままグロームが物思いにふけってしまうと話が進まない。

「それでグロームはなんで東の都ツェーントルにいたんだ？」と、俺が聞くと、

「魔物を探していた。その魔物が持って行っちゃったモノを取り返

すために」
と、答える。

「その魔物に何を取られたんだ？」

俺が聞くと、グロームは何が言いたげに口を開きかけたんだが何も言わずに口を閉じてしまった。グロームの表情になにやら強い意志が感じられる。これ以上しつこく聞いても何も言わないだろう。質問を変えてみた。

「それは先日グロームがいたザーパト村に関係がある事なのか？」

グロームは一言答えた。

「そうだ」

そこで暫く沈黙が続いた。

グロームは何も語らない。また何か考え込んでいるようだ。いろいろ考える事があるんだろう。

・

・

・・・・飽きた。

見上げると夜の空は真っ黒で星がちらちら輝いている。

雲ひとつないどこまでに澄んだ昼間の空と同じ空なのにどうしてこんなに違うんだろう・・・

・
・

・
・
・

・ ・ ・ 小僧の所でも行ってみるか。

「じゃまたな」

俺は東の都ツェーントルに向かった。

風の章 14

小僧はすぐに見つかった。小僧は神殿の結界の外にいたからだ。

小僧は風通しの悪い半地下の石に囲まれた寂れた部屋の中にいた。

寂れた部屋の明かりとりの小さな窓には柵はついているが、そんな事は俺には関係ない。風の通る隙間があれば、俺はどこにだって通り抜けられる。

俺はひらりと中に入った。小僧は固そうなベッドの上にうずくまる様にして座っていた。目をつぶっているので寝ているのか起きているのかわからない。

「よう！起きているか？」

俺が声をかけると、小僧は目を開けて俺を見た。寝てはいなかったらしい。

小僧は鳩が豆鉄砲食らったような顔をして俺を見る。

「就寝前の祈りをしていたんです。どうしたんですか？ヴィー」

「聞きたい事があった」

「聞きたい事ですか？」

「スエーヴィル村で何があったんだ」

「あの村の出来事ですか」

と、小僧は淡々としゃべり始めた。

「僕は、あの村に怪我人を治しに行っただんです。朝から、他の方々も治していたんです。するとひどく嫌な感じのする人がやって来て

“東の都の神殿から来たというのは本当か” “馬で3日かかる距離を1日で来れるものか” “お前は本当に神殿から来た者なのか” と言い出したんです。そしたら、嫌な感じが周りの人間にも広がってしまつて。それから何だか急に皆が攻撃的になつてしまつたんですよ。一体どうしたんでしょう」

「ふうん」

俺があのか村で見た暗い気を小僧にはそういう風に感じるんだろうか。 「あつ、そういうえばヴィーがここまで送ってくれたんですね。あの時はあんまり意識がはつきりしてなくて。お礼が遅れました」

小僧は姿勢を正して俺の前に立つと胸の辺りで互いの袖に手を入れ、 「本当にありがとうございます」と、深々と頭を下げた。

「通りがかつただけだ」と、俺は言つた。

それからこう付け加えた。

「乗せてやった事、誰にも言つなよ」

「本当にどうもありがとうございます」
小僧は笑いながら礼を言つた。

その時ガチャリと重厚な音を立てて古臭い扉が開いた。

風の章 15

兵士が入ってきた。

その後ろについてきたのは、ケガをした小僧を連れて飛び込んだ時に部屋にいたじいさんだった。

兵士はじいさんの中に入れると、物言わず目礼をしてガシャリと古臭い扉を閉めた。

そして兵士はじいさんを残して立ち去った。

兵士の足音が遠ざかるのを聞きながら、小僧がじいさんに話かけた。
「大司祭様？どうなさったのですか？」

そんな事はお構いなしに、じいさんは俺を見据えてこう言った。

「これはこれは白い精霊殿。先日はケガをしたスィーンをここまで運んで下さって、心から感謝しております。本当にありがとうございます」

そしてじいさんは姿勢を正して胸の辺りで互いの袖に手を入れ深々と頭を下げた。

それからこうも言った。

「しかしながら白い精霊殿、このような所でいかなされたのですか？」

俺は答える。

「通りがかっただけだ。それよりじいさん、白い精霊殿なんて変な呼び方するな。俺はヴィエーテイルだ」

「なるほど。ヴィエーテイルといえば古の言葉で風を表す言葉。

白い精霊殿は風神殿であらせられたのか。さすればあの竜巻も納

得じゃ。ふむふむ」

と、じいさんは納得している。

——どうも調子が狂うな。

じいさんも小僧も淡々とした話し方をしやがる。

シェイマ、つうのは皆こんな話し方なのか？

俺がじいさんを観察していると小僧が口を開いた。

「大司祭様、どうなされたのですか？」

じいさんは微笑してこう言った。

「うむ。ワシがあんまりスイーンを弁護しておったから、ワシも魔物に取り付かれているという疑惑がかかったらしい」

「僕のせいですか？」

「なあに對した事ではない。スイーンは気にせんでも良い。明日になれば誤解も解けよう。」

それよりスイーンは大丈夫なのかい？傷口が開いたりしてはいないかい？」

「僕は平気です。大司祭様の方こそ大丈夫ですか？」

「ワシも平気じゃ。スイーンも平気なら、今はそれで良しとしようではないか」

——よくわかねえけど、人間には人間の混み入った事情があるよう

だ。

それで俺が聞いてみた。

「ふうん。それで小僧はここで何やっているんだ？」

小僧は淡々と答える。

「魔物に憑かれているそうなんです」

「ふうん。」

「それで明日裁判にかけられるんです」

「そりゃ大変だな」

と、答えながら、俺はグロームの言葉を思い出していた。

“人間にとりつく魔物がいるんだ”

——グロームの探している魔物だろうか。

そこで俺は聞いてみた。

「小僧は魔物にとりつかれているのか？」

小僧は一瞬変な顔してから含みのある微笑を浮かべてこう言った。
「僕に憑いているのは、竜巻を起こす魔物らしいですよ。見た人がいるのだそうです」

大司祭のじいさんも小僧と同じ含みのある微笑しながら俺を見ている。

——な、なんだとお？！

「それって、もしかして俺の事なのか？」
と、聞き返すと、小僧の口元が緩んだ。

「ちょっと待てよ！俺は人間にとりつくなんて真似しないぞ！」
と、俺は真面目に言っているのに、小僧と大司祭のじいさんが二人そろって、くつくつと笑いをかみ殺している。

「どこのどいつがそんな馬鹿げた事を言っているんだ。俺が話を付けてきてやる！」

俺の周りで空気が動き出した。

「ヴィー、いいですよ。何もしないで下さい。これ以上、話がややこしくなると困ります」

と、小僧が言い、

「そうじゃの。風神殿が出てこない方が丸く収まるのお」と、大司祭のじいさんが言う。

——人間はよくわからねえな。

俺のせいみたいだから俺が解決してやろうと思ったのに。まあいつか。

そして俺の周りの空気は穏やかになった。

そこで俺は話をかえた。

「なあ、不安・疑心・憎悪いう暗い気を好んで、人にとりつく魔物の話を何か知らねえか？」

「暗い気を好んで人に憑く魔物・・・神殿の書物の中に書いてあったかもしれんのう・・・」

と、じいさんは何か考え込む。

「何でもいいから、とつと知っている事を教える！」

空気がぐわつと動いたら、小僧に言う。

「ヴィー、落ち着いて下さい」

「俺は落ち着いているぜ？」

「人の弱い心につけ込んで人にとりついてしまう魔物の話は神殿の書物に出てきます。人間は一生に一度二度はそういう魔物と共生している時期があるとも言います。誰の心にもいるし気をつけられずにいなくなってしまうような弱い魔物です。が、稀に心のバランスを壊した者が、魔物に体をのつとられてしまう事があるらしいとか、そんな話だった筈じゃが」

「ふうん。そいつは超自然界の生き物ではないな。俺達とは理が違う」

俺はグロームの役に立つかと思って聞いてみた。

「そいつを見つけない時はどうすればいい？」

「それは書いてなかったかのう」

「ふうん。その魔物が持つて行っちゃったモノを取り返したい時はどうすればいいんだ？」

「それも書いてなかったかのう」

——けっ！使えねえな！

その時ガチャリと重厚な音を立てて再び古臭い扉が開いた。

風の章 16

兵士が一人入ってきた。

その後ろには、ケガをした小僧を連れて飛び込んだ時に部屋にいたばあさんがついてきている。

兵士はばあさんの中に入ると、やはり物言わず目礼をしてガシャリと古臭い扉を閉めた。

そして兵士はばあさんを残して立ち去った。

兵士の足音が遠ざかるのを聞きながら、小僧がばあさんに話かけた。
「大教母様までどうなさったのですか？」

そんな事はお構いなしに、ばあさんは俺を凝視してこう言った。

「何故魔物がここにいますのですか？！」

ばあさんの刺さるようなチクチクとした気が俺に向かってくる。
じいさんがばあさんを制した。

「これこれ、大教母殿。

こちらの風神殿が先日スイーンを連れて来て下さったからスイーンは助かったんですよ」

じいさんが宥めると、ばあさんは目を吊り上げ

「その説は誠にありがとうございました」

と、姿勢を正して俺の前に立つと胸の辺りで互いの袖に手を入れ頭を下げた。

口では礼の言葉を述べているが刺さるようなチクチクとした気を放っている。

すると、小僧が、

「大教母様、紹介します。友達のヴィーです」
とか抜かしやがった。

「俺がいつ友達になった？」

と、言う俺と、

「魔物と人間が友達になれる筈ありません」
と、言うばあさんの声が重なった。

小僧は淡々と抗議する。

「そんな事はありません。ヴィーは僕が困っている所を二度も助けてくれました」

「たまたま通りがかったただけだ」

と、俺が言つと、

「そうですよ。魔物は気まぐれなんですから」
と、ばあさんが俺の言う事に加担してくれる。

——怒るべきなのか喜ぶべきなのか。微妙だ。

俺にわかるのは、この3人の中では一番の俺に友好的でないばあさんが一番俺の事をわかつているようだ。

「これこれ、ここにおられる風神殿は確かにスイーンの事は助けて下さったのです。人間に害を成す者を魔物と定義するならば、風神殿は人に親切にして下さる良い精霊ではありませんか」
と、じいさんがばあさんを諭している。

——魔物だ精霊だって？そりゃ人間が勝手につけた名称だろうが？！

と口を挟みたい所だが、ばあさんの方が先に口を開いた。

「人でない事に変わりありません」

やっぱり俺に一番友好的でないばあさんが一番俺の事をわかってい
る。

どうでもいいけど、ばあさんの刺さるようなチクチクとした気が常
に俺を威嚇している。

こういう気は苦手だ。

後は人間達の問題だ。

「じゃそいう事でまたな」
と、俺は早々に退散した。

風の章 17

次の日は朝から雲ひとつない澄み切ったいい天気だった。心地よい風が吹いている。俺は風に乗って遠くまでやってきた。

見晴らしの良い山頂から、遠くを眺めると、遙か彼方に、北のアルス山が白くそびえ立っている。アルス山は、この辺りで一番大きな山だから、どこへ行っても、よく見える。それに、今日は冬に戻ったみたいに寒い朝だから、空気が澄んでいて、一際はつきりとよく見える。

アルス山を眺めながら、ふと気がついた。

——あれ？　そういえば、スエーヴィル村とザーパト村の人間達はどうなった？　すっかり聞き損ねたな。

グロームに聞こうか、小僧に聞こうかと迷ったが見つつけやすいので、小僧に聞く事にした。

俺は、ぴゅーと東の都ツェーントルに舞い戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0493v/>

風と大地と炎と海と ～風の章～

2011年11月22日15時49分発行